

齋藤実盛と源平争乱

片上ゆかりの歴史上名高い人物といえば齋藤実盛(さいとうさねもり)でしょう。平安時代も終わりごろ越前に生まれ、後に武蔵国(今の埼玉県付近)を本拠地としたようです。源氏一族の内紛に際しては源義賢の遺児(後の源義仲)の助命を図り、保元・平治の乱では源義朝に従い、その後は平氏方に従うなど、源平争乱に人生を捧げました。晩年出征した加賀国篠原において、味方が総崩れになる中で敵を迎え撃ち壮絶な最期を遂げます。老兵となって白髪を黒く染め上げ錦を着て戦った姿は「平家物語」に詳しく描写され、亡骸の実盛と数十年ぶりの対面を果たした義仲は、実盛の武人としての生き様に涙したとされます。「故郷に錦を飾る」という言葉がありますがこの話に由来するともいわれます。

さて、実盛の子孫とされる南井町の齋藤さん宅には実盛が出征の際に植えたと思われるヒイラギが残されています。その西側の山腹では平安時代から鎌倉時代にかけての墓地が発見され、出土品から方上荘を管理統括した可能性のある有力な在地豪族の存在が明らかになっています。実盛に関して片上出身という確たる証拠がないのが残念ですが、実盛のような武人を輩出できる経済的基盤がこの片上にあったのは疑いのないところでしょう。

参考 青木豊昭「文殊山とかたかみ」

(文化課 深川義之)



齋藤実十郎家ひいらぎ (鯖江市指定文化財)